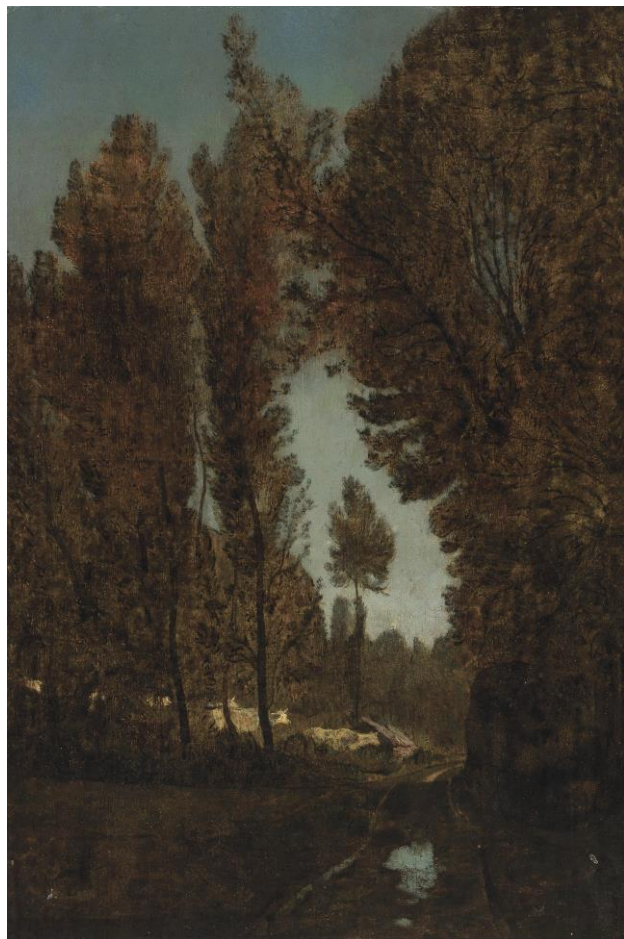


Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU 世界の文化遺産

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 森を横切る牛たち

種類 格子パネルに油彩

サイズ 60×40.5 cm

サイン有り 鑑定書 「Michel RODRIGUE」

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の西のはずれにあるバルビゾンの村では、カラーをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、ディアズ、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家である。『晩鐘』で有名なミレーもこの派に含めてよいであろう。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1847年 バルビゾンに移住

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～この時代のルソーは落選王との異名をとった。

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～

.Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 ベルリ風景 1844年頃

種類 板に油彩

サイズ 23.5×35.5cm

*鑑定 Caude Aubry, Gaston Delestre

*左下にサイン有り

※ 栃木県立美術館「19世紀フランス絵画展」1973年出展作品

※ 来歴 Puvis de Chavanvns Jr. (Neuilly) 旧蔵

森の哲人・偉大なる落選王

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の西北端にあるバルビゾンの村では、コローをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、【晩鐘】で有名なミレーやコロー、ディアズ、デュプレ、ジャック、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家であり、今ではデュプレの弟ヴィクトールも加えてバルビゾン派七星と言われている。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1836年 『ジュラ山脈の牛の山下り』落選この後13年間落選王の異名をとる。

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1847年 バルビゾン村に移住

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～

Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 バルビゾンの森

種類 板に油彩

サイズ 11.5×19cm

※左下にサイン 「Claude AUBRY」証明書付き

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の東北端にあるバルビゾンの村では、コローをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、【晩鐘】で有名なミレーやコロー、ディアズ、デュプレ、ジャック、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家であり、今ではデュプレの弟ヴィクトールも加えればバルビゾン派七星と言われている。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1847年 バルビゾンに移住

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～

Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 ホンテヌブローの森

種類 板に紙に油彩

サイズ 23×49cm

※左下にサイン

森の哲人

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の東北端にあるバルビゾンの村では、コローをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、【晩鐘】で有名なミレーやコロー、ディアズ、デュプレ、ジャック、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家であり、今ではデュプレの弟ヴィクトールも加えればバルビゾン派七星と言われている。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1847年 バルビゾンに移住

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～

.Pierre-Étienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 フォンテーヌブローの池

種類 エッチング

サイズ 30.0×42.0cm

森の哲人・偉大なる落選王

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の西北端にあるバルビゾンの村では、コローをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、【晩鐘】で有名なミレーやコロー、ディアズ、デュプレ、ジャック、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家であり、今ではデュプレの弟ヴィクトールも加えてバルビゾン派七星と言われている。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1836年 『ジュラ山脈の牛の山下り』落選この後13年間落選王の異名をとる。

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1847年 バルビゾン村に移住

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

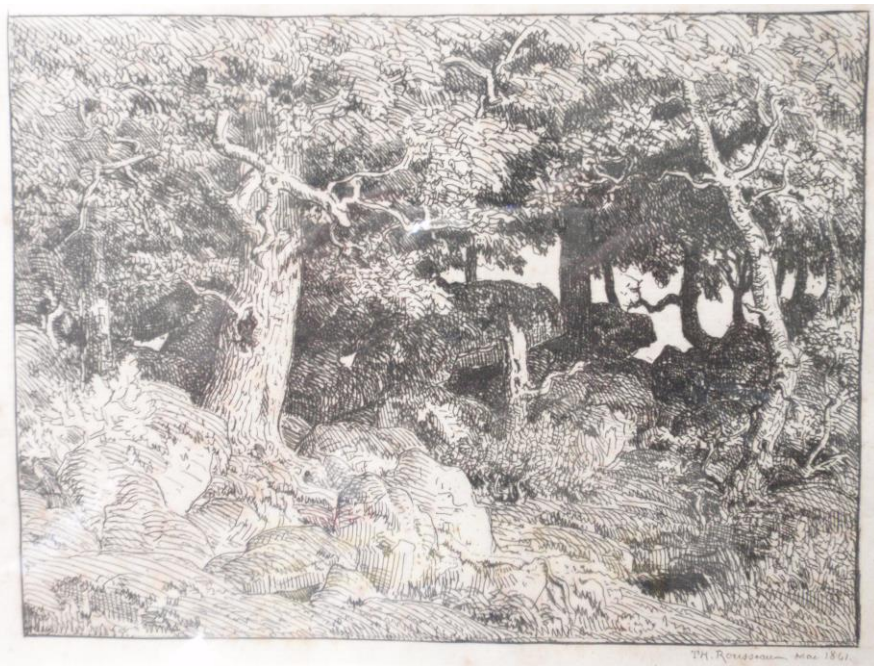
1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～

Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 **ブナの木と岩** 1861年

種類 **エッチング**

サイズ **12.6×16.8cm**

ルソーのオリジナル版画は僅か6枚だけである

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の東北端にあるバルビゾンの村では、コローをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、ディアズ、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家である。『晩鐘』で有名なミレーもこの派に含めてよいであろう。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1847年 バルビゾンに移住

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～

DEL'ART R4 (カタログレゾネ)

Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 バルビゾンの庭

種類 ガラスステロ版

サイズ 13×20cm(各)

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の東北端にあるバルビゾンの村では、コローをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、ディアズ、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家である。『晩鐘』で有名なミレーもこの派に含めてよいであろう。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1847年 バルビゾンに移住

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～

Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 **ビオの平原**

種類 **ガラスステロ版**

サイズ **22.5×28.5cm**

DE L'ART R6 (カタログレゾネ)

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の東北端にあるバルビゾンの村では、コローをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、ディアズ、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家である。『晩鐘』で有名なミレーもこの派に含めてよいであろう。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1847年 バルビゾンに移住

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～

Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 サクランボの木 1862年

種類 ガラスステロ版

サイズ 21.7×27.5cm

ルソーのオリジナル版画は僅か6枚だけである

DE L'ART R5 (カタログレゾネ)

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の東北端にあるバルビゾンの村では、カラーをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、ディアズ、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家である。『晩鐘』で有名なミレーもこの派に含めてよいであろう。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1847年 バルビゾンに移住

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～